

すべての子どもに機会を すべての子どもに夢を

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

2015年度年次報告書

特集1

希望への伴走者

特集2

夢への道のり

クーポン利用者たちの軌跡





チャンス・フォー・チルドレン
2015年度年次報告書

特集1

希望への伴走者

The story of
Marino Uchiyama
and Saki Kikuta

取材
編集／辻和洋

写真／安田
菜津紀

法人設立5周年を迎えて

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(CFC)は、2016年6月20日をもって、法人設立から5年を迎えました。これまでに学校外教育パウチャーを利用した子どもは延べ1,494名にのぼり、約400名の子どもたちが進学や就職を通じて夢の実現に近づくことができました。活動を支えてくださったすべての皆さんに、心より御礼申し上げます。

NPO法人ブレーンヒューマニティーの一事業としてCFCのプロジェクトが発足した後、同団体から独立し、法人を設立する契機となったのが2011年3月11日に発生した東日本大震災でした。震災発生から数ヶ月後、何のスキルも経験もない3人の20代の若者が仙台市内のマンションの一室に移り住んで活動をスタートさせたあの日からは、想像がつかないほどに支援の輪が広がっていることを実感しています。

活動を通じて、災害や家庭の事情によって経済的な課題を抱える多くの子どもたちと出会いました。どんなに困難な状況であっても、力強く前を向いて進み続ける子どもたちの姿から、彼ら・彼女らは、決して「かわいそうな存在」ではなく、今後の日本の未来と一緒に支えていく「仲間」だということに気付かされました。

ある子どもは「パウチャーの支援を通じて、自分の家族以外に支えてくれる人たちがいるということに気付くことができた。」と話してくれました。顔の見えない支援者の皆さまの存在が、間違いなく子どもたちの活動を後押ししています。私たちは、子どもたちに対して、教育の機会を提供するだけでなく、子どもたちの可能性を信じる支援者の皆さまの温かい思いを届けることができる「架け橋」のような存在でありたいと強く思います。

引き続き子どもたちに寄り添いながら、子どもたちをめぐる課題の解決に全力を尽くします。今後とも、温かいご支援・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



 Chance for Children

代表理事

今井 悠介 (いまい ゆうすけ / 右)

奥野 慧 (おくの さとし / 左)

INTILAQ Tohoku Innovation Center
©Natsuki Yasuda

チャンス・フォー・チルドレン(CFC)沿革

阪神・淡路大震災を原点に、被災した子どもたちの教育支援を行ってきたNPO法人ブレーンヒューマニティーのプロジェクトとして2009年に発足。その後、2011年に発生した東日本大震災を契機に同団体から独立し、一般社団法人チャンス・フォー・チルドレン設立。2014年、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人となる。2016年6月に5周年を迎えた。

Contents

P.01 法人設立5周年を迎えて

P.02 子どもたちの声

P.02 特集1 希望への伴走者

P.07 特集2 夢への道のり

—クーポン利用者たちの軌跡—

P.11 活動実績

P.11 東日本での取り組み

P.12 西日本での取り組み

P.13 ご支援いただいた皆さま

P.15 財務・会計

P.17 中長期ビジョンと2016年度の活動

P.18 スタッフ紹介

Cover Photo



©Natsuki Yasuda

皆さまからの温かいご支援により、2015年度は373名の子どもたちが学習塾や習い事などで学ぶチャンスを得ることができました。子どもたちは日々、希望を抱いて学習に励んでいます。CFCクーポンを持ち、笑顔を見せてくれているのは、宮城県に住むクーポン利用者の一人、高校3年生の内山まりのさん。

東日本大震災から5年――。

家屋やビルが崩れ落ち、津波で流されたあの時から変わってしまった街は、少しずつ復興を遂げ、新たに活気の芽を息吹かせようとしている。人の営みの力強さを感じさせる。

しかし、一方で、時を経るほどに、震災の爪痕は、直接与えた被害だけではないことを知る。

目には見えにくい格差や心の問題、人との絆にすら影響を与えていている。

そして、間接的に犠牲になった人もいる。

CFCは震災から生まれた多くの課題を抱えた子どもたちに寄り添い続けている。絶えず希望の灯火を捧げる“伴走者”でありたい。

それは、子どもたちを取り巻く多くの人の思いもある。こうした人々の思いに触れ、

様々な苦難を乗り越えようとする子どもたちの姿を紹介する。



クーポン利用者

内山まりのさん 高校3年生(18)

「何をするのも一緒に良いにぎやかな家族」

まりのさん(18)は、フェンシング部で汗

を流す。蒸し暑い体育館で、マスクとメタルジャケットをつけて試合形式の練習。「うまく駆け引きをして」と仲間の声

が飛び、小刻みにステップを踏む。マスクを脱ぐと、爽やかな笑顔が弾ける。放課後約3時間の練習が終わると、塾へ向かう。「お父さん『部活も勉強もよく頑張ってるね』と言つてくれるかな」

震災が発生。生き延び、家に帰らず治療にあたった父

2011年3月11日。まりのさんが小学校6年の頃、教室でランドセルに教科書を詰めて、帰る支度をしていたとき、大きな揺れが起つた。電気が消え、避難を促す放送も途切れ。机の下にもぐり込み、怖くて泣いていた。揺れがおさま

「お父さん、帰つて来た!」。小学生だったまりのさんは、金曜日の夜にキッチンの窓から父が運転する車のライトが見えると、玄関まで走る。父が家のドアを開け、荷物を降ろして食卓の椅子に座ると、ひざの上に乗る。いつもそこが自分の“特等席”だった。父は体重110キロ、身長187センチの大柄な体格。大きな手で抱えてくれ、「学校はどうだつた?」といつも笑顔で聞いてくれた。そんな父が誇らしかった。

り、グラウンドに避難していると、2つ歳上の兄が迎えにきてくれた。自宅は倒壊を免れ、家族は無事だったものの、家具がぐちゃぐちゃに倒れ、まともに住める状態ではなかった。当時、石巻市の病院で多くの患者の治療にあたっていた父からは「津波で車が流されたけど、大丈夫」とメールが来た。それから父はしばらく自宅には帰つてこなかつた。

震災から約1カ月後、まりのさんは、ようやく自宅に戻つてくる父を最寄り駅まで迎えに行つた。父はやせて、ひげが伸びきつていた。見たこともない父の無精ひげを見て幼心に「うわ、ひげだ」と叫んだ。すると、父は笑つて、携帯している記録用のカメラをまりのさんに向けて、シャッターを切つた。嬉しそうだつた。

数日後、学校で授業を受けていると、父は「いつてきまーす」と言つて家を出て行つた。

広げてくるので、仕方なくハグをした。父は「いつてきまーす」と言つて家を出た。慌てて先生が呼びに来た。母から電話がかかってきていた。「お父さんが倒れた」。急いで姉と兄と、車で石巻市の病院に向かつた。

その後も、通信手段がなく、病院に患者や病院職員が取り残されるなか、津波で水没した街を胸まで海水につかりながら、約2キロ先の市役所まで助けを求めに行き、寝る間を惜しんで治療にもあつた。あまりの激務に、1カ月後に10キロ以上やせていた。それでも、石巻市で一人暮らしをしながら、ほかの病院や避難所を回り、被災して負傷した患者と向き合う日々を続けていた――。

「お父さんは、震災の過酷な状況のなかで生き延びたのに、なんで……」震災

から約1年後、父の突然の死。父は、震災関連死として認定された。元々、父が毎日、自宅にいるわけではなかつたので、日常の生活に大きな変化は感じられなかつた。しばらくすると帰つてくるよう気がして、週末になるとキッチンの窓のぞいてみたこともあった。母は病院の事務職員として働き始めた。奨学金や保険などの書類で「母子家庭」という言葉を見るたびに、辛くなつた。少しづつ、少しづつ、父の死を受け止めていくしかなかつた。

それから1年経つても、父の忙しさは変わらず、自宅に戻つてるのは、数週間に一度だけだつた。まりのさんは中学生になり、父に将来、医療関係の仕事を就きたいと話すと、「いつか、一緒に働けたらいいね」と返してくれた。

震災から1年。突然の父の死

震災の翌年の2012年3月。週末が終わり、ある日の月曜の朝、父は自宅から病院に向かつた。いつも家族とハグをしてから出発するが、まりのさんは、中学に入つてからは照れくさくてハグをしなかつた。でも、その日は父が手を



父の姿が描かれた絵本を開くまりのさん。医師としての父の志に思いをはせる。

父は過労死だつた。家族には、辛い顔を一度たりとも見せていなかつたが、震災後の父の働きぶりは壮絶なものだつた。父は、地震の発生時、がん患者の胃の切除手術をしていた。病院の1階まで津波が襲い、病院の非常電源までが切れた。それでも、ほかの患者と病院職員を避難させながらも、父は懐中電灯の明かりの中で患者の手術を続けたといふ。

仙台市出身。父母、姉、兄と、家族5人で、宮城県名取市で暮らしていた。夏は海、冬はスキーに行き、ちよつとした休日にも公園や映画館に岡山へ出かけ、何をするにも家族揃つて過ごすのが、一家の日常生活だった。父・哲之さんは外科医で、石巻市の沿岸部の病院に勤務。単身赴任をし、週末だけ自宅に戻つた。家族旅行でも、緊急連絡用の携帯電話を首にぶら下げ、いつでも病院に駆けつけられるようにしていただが、何よりも家族の時間を大切にしていた。まりのさんは、そんな父が誇らしかつた。

高い目標を持つて受験 CFCの支援で猛勉強

受験を控える中学3年になった。志望校は、小学校の頃から憧れていた県内有数の進学校で、文化祭などの行事も盛んな学校。そして、父の出身校でもあった。受験のために塾で気兼ねなく勉強ができるようにと、母の勧めでCFCのクーポン利用に応募し、支援を受けることになった。「これで一生懸命頑張れる。よかったです」。毎月、塾の先生に「お願ひします」と言つて、クーポンを手渡し、勉強に励んだ。

高い目標を立てて意気込んでみたものの、部活動と両立していたこともあり、成績はなかなか伸びなかつた。高校の受験は、前期と後期の2度挑戦できるが、前期試験に落ちてしまった。それでも、「お父さんにも応援されていた、どうして行きたい学校だから」と、志望校を変えず、後期までの約2週間、最後の最後まで猛勉強した。自宅で塾までの道のり15分が唯一の息抜きだった。

高い目標を立てて意気込んでみたものの、部活動と両立していたこともあり、成績はなかなか伸びなかつた。高校の受験は、前期と後期の2度挑戦できるが、前期試験に落ちてしまった。それでも、「お父さんにも応援されていた、どうして行きたい学校だから」と、志望校を変えず、後期までの約2週間、最後の最後まで猛勉強した。自宅で塾までの道のり15分が唯一の息抜きだった。



菊田沙樹さん
大学4年生(22)

ブラザー・シスター

クーポン利用者を支える 大学生の存在「ブラシス」

まりのさんに寄り添う大学生がいる。東北福祉大学4年、菊田沙樹さん(22)。CFCは、クーポンを利用する子どもの一人ひとりに、「お兄さん、お姉さん役」として大学生を配置し、サポートする「ブラザー・シスター」制度を設けています。通称「ブラシス」。この制度を通じて、菊田さんはまりのさんの日々の生活を陰ながら支えている。

「大丈夫。合格していることを念じて待とうね」。2014年3月、菊田さんは、高校受験を終えたばかりのまりのさんにそう声をかけた。月に一度、約30分電話で話す。学校生活、部活、将来の夢……。何気ない会話をの中に安心感とやる

気が芽生える。「離れて暮らす妹」のようなまりのさんの「お姉さん」となつてから、約1年が経とうとしていた。「まりのちゃんは努力家で頑張り屋さん。私は他人だからこそ何でも話せる斜め上の存在であり続けたい」と菊田さんは話す。

菊田さん自身も被災を経験。仙台市内の高校1年の頃、部活に行く途中、地震が発生した。その後、近くの小学校に避難した。ラジオで「海が燃えている」と聞き、とんでもないことが起きていると不安に思つた。自宅は倒壊を免れたものの、祖父の住む気仙沼の自宅は全壊。幼い頃からよく遊びに行つていた島が津波で壊滅状態になつた。お正月やお盆には必ず訪れ、庭で野菜を採つたり、目の前の海で遊んだりした思い出の気仙沼の家が、無惨に崩れ落ちていた。自分の

「努力すれば身になるよ」
父の残した言葉を胸に
医学の道へ

高い目標を持つて受験 CFCの支援で猛勉強

高校生活は、部活に勉強と、充実した日々を過ごす。嬉しかったこと、悲しかったこと、父に直接言えないのは寂しい。作文などで表彰状をもらったり、成績表が返ってきたりすると、いつも父の仏壇の前に置き、「もらってきたよ」と心の中でつぶやく。手を合わせたり、線香をあげたりはしない。どこかで父は生きています」と思いたい。

父の葬儀は式場に入りきらないほど、大勢の参列者が訪れた。父の働きぶりは、絵本にもなつた。時折、絵や文章の背景に表れている医師としての父の志に思いをはせる。「いつも患者さんに慕われている偉大な父がいました」。そんな父を偲んで自宅を訪れる父の同級生らに「お父さんに似ているね」と言われるとき、少し照れくさい。

今年は高校3年。大学受験が近づき、CFCの支援を受けながら、部活の傍ら塾に通つている。「母の収入だけでは苦しいなか、心配なく学校にも塾にも行けるのは、支援してくださつての方々のおかげです。感謝しかありません」と話す。父は柔道を続けながら、医学部へ進んだ。自分と重ね合わせる。姉も兄も医療関係の仕事を目指している。そして私も――。

今年は高校3年。大学受験が近づき、CFCの支援を受けながら、部活の傍ら塾に通つている。「母の収入だけでは苦しいなか、心配なく学校にも塾にも行けるのは、支援してくださつての方々のおかげです。感謝しかありません」と話す。父は柔道を続けながら、医学部へ進んだ。自分と重ね合わせる。姉も兄も医療関係の仕事を目指している。そして私も――。

足下に天井があるのを見て、呆然と立ち尽くした。「何もできなかつた」

大学生になり、「震災復興のために何かできることをしたい」という思いで、CFCの活動に参加。まりのさんのサポートをすることのほか、同じ活動をする大学生同士でもよく語り合つたり、研修や募金活動をしたりした。「自分よりも大きな被害に遭つている人がいると思うと、自分が辛いと言えないと思っていた。でも、ここには本音を受け止め合えるメンバーがいた。相手の思いを大事にする」とのことの大切さを知りました」と話す。

まりのさんの高校合格が決まった後、クーポン贈呈式で2人は顔を合わせた。そして、「よかつたね!」と手を取り合つて喜んだ。そのとき、まりのさんは菊田さんに「大学生になつたら私もボランティアがしたいです」と打ち明けた。

2人は今も変わらず、毎月、電話を続ける。「今年は大学受験だね。学校はどう?勉強はうまくやれてる?」。菊田さんは聞き役に徹することを心がけている。

菊田さんはCFCの活動を「大学生活のすべて」と振り返る。今年度で大学を卒業する。「震災からもう5年が経つのかと思う。今、表面上の被害だけじゃないことを痛感しています。街からがれきが消え、新しい建物が建つても、被災したことは忘れちゃいけないんだなと思つています。まだまだ支える人の力が必要だなと思います」。今年も新たに54人の大学生がCFCの活動に加わつた。CFCの「ブラザー・シスター」たちは、これからもずっと子どもたちに寄り添い、夢に向かつてともに走り続ける。

やりとりを始めて3年が経つまりのさん(左)と「ブラシス」の菊田さん。二人の会話は笑いが絶えない。まりのさんは、日々の悩みや進路のことなど、何でも相談できる菊田さんの存在は大きいと話す。



ブラザー・シスター制度

大学生ボランティアが子どもたちを継続的に見守ります。



大学生ボランティアが月に一度、電話や面談を通して学習や進路の相談にのる「ブラザー・シスター制度」を導入しています。ブラシスは、パワチャヤーの利用促進や利用者の悩み相談等に応じ、子どもたちを支えています。



CFCは、西日本地域でも、経済的に苦しい家庭の子どもたちに支援を続けている。「経済的な理由で、子どもたちに機会を失わせることがあつてはならない」

そんな多くの支援者の思いが、子どもたちにしつかりと届いている。支援に感謝の気持ちを抱きながら、希望を捨てることなく、懸命に努力を重ねる子どもたちがいる。2015年、クーポンを利用した子どもたちのなかには、医師になることを志す高校生の姿もあつた。

公営住宅の一室。「うーん、難しいな。こういう解き方はどうやろ」。高校1年、中村由美さん(仮名・16歳)が3つ上の兄に、数学の問題の解き方を尋ねると、兄が親身になって考え、そう答えてくれた。さら

に、隣の部屋に入り、4つ上の兄に尋ねた。「なんでこんなもんだけへんのや」といたずらっぽく笑いながら、図をササッと書き、解法を教えてくれた。「問題の解き方が分からぬときは兄を『はしご』するんです」と笑顔で話す。将来の夢は医者。志は高い。

生活は決して楽ではない。母子家庭で、2人の兄と母と祖母と、5人で暮らす。母は結婚後、父の実家に嫁いだが、しばらくして約1億円の借金が発覚。テープルの上に大量の支払い請求書や借用書が積まれ、「頭が真っ白になった」。父の両親が経営に失敗して膨れ上がった借

取材・編集／辻 和洋 写真／安田 菜津紀

チャンス・フォー・チルドレン
2015年度年次報告書

特集2

夢への道のり クーポン利用者たちの軌跡

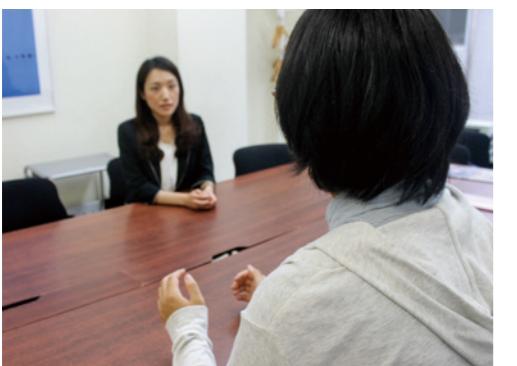


CFC西日本

中村 由美さん(仮名)
(なかむら・ゆみ)

高校1年生 / 兵庫県

クーポン利用期間
2015年4月～2016年3月



CFC山本(左)に感謝の気持ちと夢を語る中村さん。

りが募った。そんなとき、インターネットでCFCのクーポン利用者を募る知らせを見て、応募した。面接審査では、とても緊張したが「読書と勉強が大好きです」と必死に伝えた。審査結果を通知する冊子が、自宅に届き、恐る恐る封を開けた。支援が受けられるとの通知が入っていた。「もっと勉強ができる」と、喜びと感謝の気持ちが同時にこみ上げてきた。早速、受験対策の通信講座を申し込んだ。「交通費や時間がもつたない。自分で勉強のペースは作れる」と塾は選ばなかった。朝は5時に起きて約1時間半、夜は3時間半、家事を手伝いながら机に向かった。一番上の兄は自らの大学受験の勉強の手を止めて、解けない問題を教えてくれたこともあった。

受験の当日。小論文と面接がある式の試験だつたが、うまく答えられなかつた。朝は5時に起きて約1時間半、夜は3時間半、家事を手伝いながら机に向かった。一番上の兄は自らの大学受験の勉強の手を止めて、解けない問題を教えてくれたこともあった。

その後、少しでも暮らしを変えた遠く離れた母子寮に住んだ。8畳一間の4人暮らし。母は食料品店のレジと介護ヘルパーの仕事をかけもちしながら、子ども3人を育てた。貧しいけれど、「子どもたちの幸せだけは」と必死だった。絵本、塗り絵、折り紙……。ゲームは買えないけれど、いつも家族一緒にになって遊ぶ、勉強もした。

小学校に上がる、本が大好きになつた。図書室で借りた本は、6年間で約1000冊。手提げ袋いっぱいに本を持つて帰り、兄らと一緒にになって読み漁つた。新しいことを知ることが楽しくて、先生の話を聞いたり、実験をしたりするのが好きだった。夏休みの宿題は3日間で終わらせた。

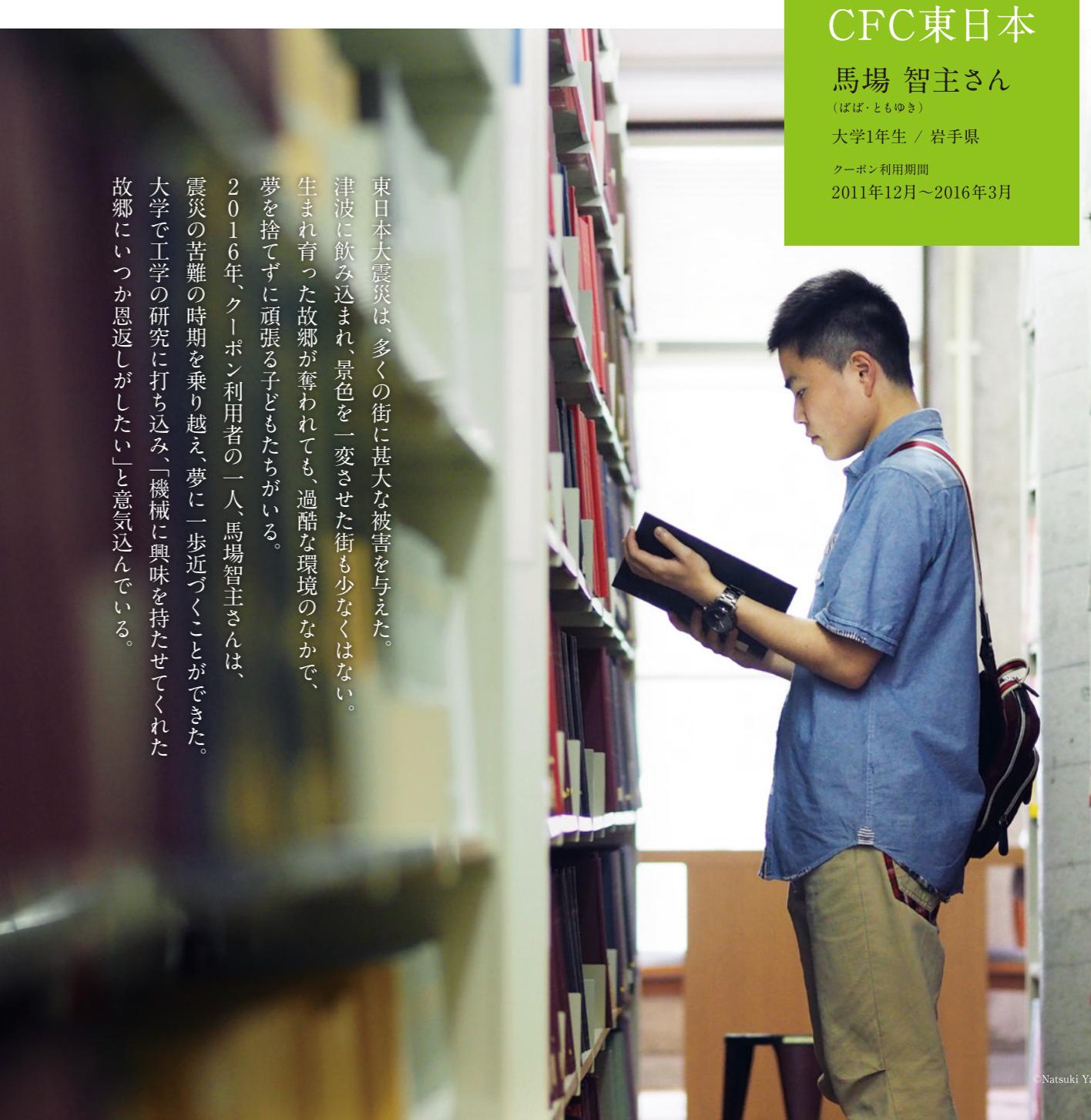
中学3年になり、受験が近づいた。周囲の友達たちは塾に行き始めた。滑り止めて勉強をし始めた。朝、子どもたちの学校の私立高校は受けられない。焦りばかりで、母は看護師を目指して、看護学校

かつた。「あれだけ準備したのに、落ちたな……」。とぼとぼと歩いて家に帰った。次の試験を見据えて頭を切り替えるしかなかった。

合格発表の日。同級生と志望校まで合格者発表を見に行つた。受験票と掲示板の合格者番号を見合わせた。「え、ある? 信じられない」。本当に自分の番号か、3回確認を繰り返した。バス停で待つているとき、公衆電話から母に電話した。「合格! 合格した!」。家に着くと、母と抱き合いで飛び上がつて喜んだ。

今も朝5時に起きて、目をこすりながら、すぐに机に向かう。約1時間勉強をしてから高校に行く。CFCのクーポンを利用しながら受講している通信講座は、学校の授業を先取りした内容。分からぬときは兄が教えてくれる。母も少し元気になり、外に出られるようになつた。

「私はお母さんの子どもに生まれてよかつた。この家族でよかつたなと思う。いつも一緒に、誰も夢を否定せず、応援してくれる」。約3年前から生活保護を受け、ぎりぎりの生活が続く。でも、前に向かって進んでいると思える。「お母さんが目指していた医療現場で働くこと、私が医者になつて叶えたい。支援をし、応援してくれる方がいるから、その思いにも応えたいです」。夢を語る由美さんの目には希望の光が灯つていた。



「俺、作つたことあるよ」。東北大工学部1年、馬場智主さん(19)は、戸惑うメンバーにそう伝えた。宮城県の景勝地・松島のホテルでの新入生合宿。大宴会場で、馬場さんが所属する電気情報物理工学科の新入生約250人が6人一組で、一齊にモーターやを回すための回路を作り始めた。クリップを曲げ、エナメル線を巻きつけ、磁石を置く。すると、手作りのモーターが勢い良く回り出した。「おおーっ」。全員の前で回路について発表し、最優秀賞に選ばれた。

岩手県宮古市出身。沿岸部の漁師町で育つた。幼稚園の頃、漁師の父の軽トラックに乗り、よく入り江になつていて港までついていった。潮風が吹き抜けるなか、小型の船「さっぽ船」が漁を終えて港に次々と帰つてくる。ウニやアワビが入つた網がクレーンで引き上げられる。フックにロープが引っかかり、ゆづくりと動く。ウイーン、ガシャン。不思議そうに見上げていると、「やつてけろ」と港の作業場にいた父の仲間に、クレーンを動かすため操縦ボタンを押すのを頼まれた。岩手県宮古市出身。沿岸部の漁師町で育つた。幼稚園の頃、漁師の父の軽トラックに乗り、よく入り江になつていて港までついていった。潮風が吹き抜けるなか、小型の船「さっぽ船」が漁を終えて港に次々と帰つてくる。ウニやアワビが入つた網がクレーンで引き上げられる。フックにロープが引っかかり、ゆづくりと動く。ウイーン、ガシャン。不思議そうに見上げていると、「やつてけろ」と港の作業場にいた父の仲間に、クレーンを動かすため操縦ボタンを押すのを頼まれた。

数日後、先に家の様子を見に行つた母が「家がダメだ」と涙を浮かべて言つた。その後、父と一緒に家の前まで行つた。家のあつた場所は土台だけになつていて、近くに2階部分だけが崩れ落ちていた。がれきの中から、思い出の品を探し出す。自衛隊の隊員が「これは必要ですか」と聞かながら、一緒に探してくれた。アルバムや幼い頃に撮つたビデオテープが見つかった。その近くで、小さい頃から集めていた電気部

2011年3月11日。中学1年生だった馬場さんは、先輩の卒業式のために体育馆で合唱の練習をしていた。突然、ピアノの伴奏者が演奏をやめた。その瞬間、ドーンという音とともに、体育馆が大きく横に揺れだした。思わず、床に伏せた。搖れがおさまり、体育馆を出ると、防災無線のサイレンが流れた。「津波3メートル」。しばらくすると、次は「津波6メートル」と放送された。「嘘だろ」。徐々に津波の高さが上がつていて、街が次々と飲み込まれていった。家族は、当時バラバラになつたが、それぞれ山に逃げたり、避難所に逃げたりして、なんとか無事だった。

中学2年になり、学校でCFCのクーポン利用者を呼びかけるチラシが配られた。元々勉強が好きで、算数の九九もクラスで一番早く覚えた。受験も近づくなかで、もっと勉強がしたいと思いつつも、「無理かな」と思つても、応募した。CFCから支援されることが決まり、「好きな勉強が思う存分できる」と救われた気持ちになつた。クーポンのおかげで、初めて塾に通い始め、「頑張つて勉強に入りたい」と思うようになった。

震災から5年が経ち、父は漁師の仕事に戻り、活気のある港が戻りつつあります。昔から父の口癖は「漁師を継がないといけない」ということは考えなくていい。自分の好きなことをやれ」。職人気質で荒々しいところもあるけれど、いつも温かい眼差しを持つ父を尊敬している。大学の研究では、医療機器の開発に興味があるが、いつか、工学で地元の漁業を手助けできなかつとも考へていて。支援してくださつた方の助けがなかつたら、今の自分はないです。今、幸せですか」。これから、憧れのキャリアパスで、日本研究にいそしむつもりだ。

志望校を決めたからには、徹底して勉強に打ち込んだ。塾に通いながら、学校で与えられた宿題は2、3回繰り返した。中学3年から高校2年まで暮らしていた仮設住宅では、家族が寝ると6畳間の部屋の押入れや車の中でも英語の発音練習をした。高校3年になると、寝食以外はすべて勉強に費やした。

志望校を決めたからには、徹底して勉強に打ち込んだ。塾に通いながら、学校で与えられた宿題は2、3回繰り返した。中学3年から高校2年まで暮らしていた仮設住宅では、家族が寝ると6畳間の部屋の押入れや車の中でも英語の発音練習をした。高校3年になると、寝食以外はすべて勉強に費やした。

西日本での取り組み

貧困の世代間連鎖を
断ち切るために

CFC西日本では、経済的に困難を抱える子どもたちの教育機会を保障することで、貧困の世代間連鎖を断ち切ることを目指しています。



東日本での取り組み

子どもたちの未来と
被災地復興のために

CFC東日本では、東日本大震災で被災した子どもたちの教育機会を保障し、その成長を支え、被災地の長期的復興に寄与することを目指しています。



©Natsuki Yasuda

CFC西日本概要(2015年度)

対象者	生活保護受給世帯の小学生から高校生 (兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、滋賀県のみ)
給付額／人	小学生： 15万円 中1・中2／高1・高2： 20万円 中3／高3： 30万円
バウチャー利用期間	2015年4月1日～2016年3月31日
バウチャー利用者数	9名 学年別： 小学生1名、中学生5名、高校生3名 地域別： 兵庫県9名
バウチャー利用率	77.1% (利用額／給付額)

CFC西日本進路実績(2015年度)

中学3年生の100%が高校に進学(4名／4名)
※2015年度は高校3年生の利用者はいませんでした。

審査方法

【新規利用者審査】

【第1次審査】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、生活保護受給証明書を提出
- 審査基準 ▶ 自己向上／学習意欲／進学・就職意欲(中高生のみ)

【第2次審査】

- 面接審査 ▶ CFC理事、アドバイザー(外部有識者)等による面接
- 審査基準 ▶ 自己向上／学習意欲／日常生活／進学・就職意欲(中高生のみ)

【継続利用者審査】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、生活保護受給証明書を提出
- 審査基準 ▶ 生活保護受給状況、当該年度のバウチャー利用状況

CFC東日本概要(2015年度)

対象者	東日本大震災で被災した小学生から高校生 (全国に避難している児童生徒も含む)
給付額／人	小学生： 15万円 中1・中2／高1・高2： 20万円 中3／高3： 30万円
バウチャー利用期間	2015年4月1日～2016年3月31日
バウチャー利用者数	364名 学年別： 小学生119名、中学生97名、高校生148名 地域別： 岩手県40名、宮城県272名、福島県42名、 山形県1名、新潟県1名、栃木県2名、埼玉県1名、 東京都2名、京都府3名 住家被害： 全壊・原発避難204名、大規模半壊51名、 半壊45名 人的被害： 父死亡・行方不明18名、母死亡・行方不明7名、 その他親族死亡・行方不明30名
バウチャー取扱事業者	123事業者 (2016年3月31日時点)
バウチャー利用率	82.4% (利用額／給付額)

CFC東日本進路実績(2015年度)

中学3年生の100%が高校に進学(51名／51名) アンケート回収率89.5%
※高校進学率 全国平均:98.5% (出典)文部科学省「平成27年度学校基本調査」

高校3年生の93.5%が大学等に進学(29名／31名) アンケート回収率86.1%
※大学等進学率 全国平均:54.5% (出典)文部科学省「平成27年度学校基本調査」

中学3年生・高校3年生の93.9%が希望する進路に進んだ(77名／82名)
アンケート回収率88.2%

審査方法

【新規利用者審査(進学受験枠)】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、学習・進学意欲、学年、学校外教育の利用状況

【新規利用者審査(一般枠)】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、学習・進学意欲、学年、学校外教育の利用状況、
教育機関等(学校、支援団体等)による推薦点

【継続利用者審査】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、当該年度のバウチャー利用状況

2015年度のスケジュール

▶継続利用者(2014年度から継続してバウチャーを利用している子ども)

2015年 4月1日	バウチャー継続利用開始(有効期限2016年3月31日)
2016年 3月10日	2016年度バウチャー継続利用者決定 (2016年4月1日から継続利用開始)
3月21日	2016年度バウチャー贈呈式開催

▶新規利用者(2015年度からバウチャーを利用始めた子ども)

進学受験枠(中学3年生・高校3年生の受験生が対象)
2015年 2月6日 バウチャー新規利用者募集開始
3月17日 バウチャー新規利用者募集締切
4月21日 バウチャー新規利用者決定
6月1日 バウチャー新規利用開始(有効期限2016年3月31日)

一般枠(中学3年生・高校3年生以外の学年が対象)

2015年 6月1日	バウチャー新規利用者募集開始
7月10日	バウチャー新規利用者募集締切
8月6日	バウチャー新規利用者決定
9月1日	バウチャー新規利用開始(有効期限2016年3月31日)

プラザー・シスター制度

2015年度のスケジュール

2015年 4月1日	初回面談開始(以後、毎月1回実施)
4月22-26日	定期研修実施(以後、隔月実施)
5月30-31日	養成研修実施(42名養成)
8月27日	ケース勉強会(不登校の子どもの支え方)
9月20-27日	フォローアップ研修実施
11月14-15日	陸前高田での実地研修実施
12月26日	スキルアップ研修実施
2016年 2月18日	ケース勉強会(発達障害の子どもの支え方)
2月26日	ケース勉強会 (子どもの問題への向き合い方)
3月31日	面談終了

大阪市塾代助成事業の業務運営

2012年度から実施している「大阪市塾代助成事業(学校外教育バウチャー事業)」の業務運営を凸版印刷株式会社と共に実施しました。2015年10月からは対象者を拡充し、市内の中学生の半分に当たる約31,500名を対象に事業が行われました。また、バウチャーが利用できる学習塾等の参画事業者数は1,646事業者(2016年1月時点)まで増え、多くの子どもたちが学習塾や文化・スポーツ教室等の幅広い教育サービスでバウチャーを利用しました。CFCは、今後も自治体や民間企業との協働による学校外教育バウチャー事業を展開し、多くの子どもたちに教育機会を提供していきたいと考えています。

2015年度大阪市塾代助成事業の概要

対象者	大阪市内に居住している中学生を養育している者 で、養育者とその配偶者の2014年中の合計所得が 大阪市が定める所得要件に該当する者
交付対象者数	4月～9月 約20,000名 10月以降 約31,500名
交付額	月額1万円
事業実施主体	大阪市
運営事業者	凸版印刷株式会社 / 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

審査方法

【新規利用者審査(進学受験枠)】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、学習・進学意欲、学年、学校外教育の利用状況

【新規利用者審査(一般枠)】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、学習・進学意欲、学年、学校外教育の利用状況、
教育機関等(学校、支援団体等)による推薦点

【継続利用者審査】

- 書類審査 ▶ エントリーシート、公的所得証明書(又は生活保護受給証明書)を提出
- 審査基準 ▶ 世帯収入・所得状況、当該年度のバウチャー利用状況

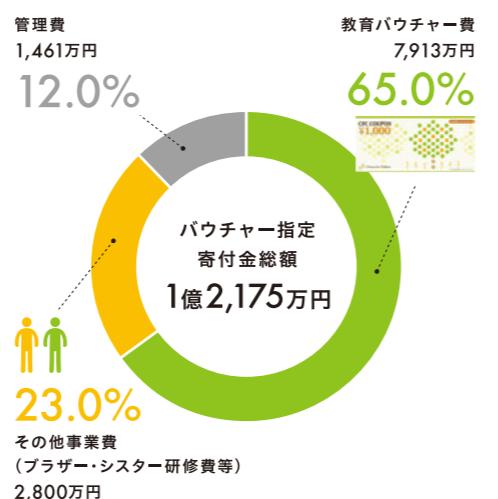
2015年度にいただいた指定寄付金等の使途

2016年度は9,605万円分のバウチャーを454人の子どもへ提供

2015年度にいただいた学校外教育バウチャー指定寄付金・会費・民間補助金1億2,175万円のうち、65%にあたる7,913万円を2016年度に提供する教育バウチャー費として使用します。2016年度は、この7,913万円に過年度に提供したバウチャーの未使用分等を加え、総額9,605万円分の教育バウチャーを454人の子どもに提供する予定です(2015年度は7,815万円分のバウチャーを373人の子どもに提供)。寄付金の23%に当たる2,800万円を、バウチャー利用者の募集・選考費、プラザ・シスター研修・面談費、調査研究費等の事業費として使用します。

学校外教育バウチャー指定寄付金・会費使途に関するお約束

- ① 寄付金の85%以上*を子どもへの直接的な支援費として使用します
※65%以上を教育バウチャー費、残り20%程度をその他事業費(プラザ・シスター活動費、調査研究費等)に充当。
- ② 寄付金の15%未満を法人の管理費*として使用します
※子どもたちを間接的に支えるための費用。管理を行う職員の手数料費、広報費等。



寄付金・会費・助成金収入の推移 (※正会費、運営費指定寄付金、受託収益、雑収益を除く)

個人寄付金・会費が1,000万円増加

CFCの財務面の課題は、収入の大部分を数社の企業や団体による大口寄付に依存している点です。そのような課題に対して、CFCでは2014年度より、個人の皆様にも支援の輪を広げるための施策(講演活動や白書の発行を通じた社会課題の可視化)に力を入れてきました。その結果、2015年度は個人寄付・会費が前年よりも約1,000万円増加(前年比約70%増加)しました。

企業・団体寄付、民間助成金が減少

個人からの支援が拡大する一方で、企業・団体寄付・助成金は約900万円減少したため、収入全体としては2014年度と比べてほぼ横ばいとなりました。現在支援を継続している寄付者の皆様に支援をこれからも継続していただくとともに、更に多くの方に支援の輪を広げるために、2016年度はシンクタンクと協働して、バウチャー事業の「ソーシャル・インパクト・レポート」を発行し、事業成果の可視化に取り組みます。

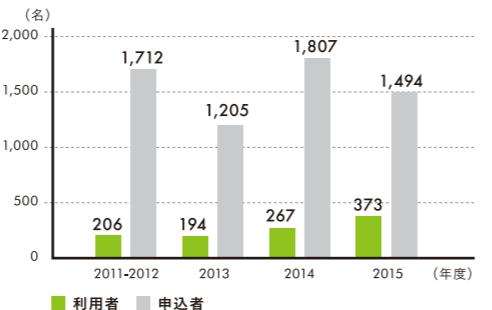


バウチャー利用者・申込者数の推移

2015年度も1,494名の子どもから申込み。5年で5,178名が落選。

寄付等の拡大により、バウチャー利用者数は、増加傾向にあるものの、毎年定員を大幅に超える子どもからの申込みがあります。2015年度は1,494名の子どもたちから申込みがありました。5年間で計5,178名の子どもたちが落選しており、多くの子どもたちがCFCの支援を待っています。2016年度は、計500名の子どもへのバウチャー提供を目指して、寄付金の募集を行います(2016年度寄付金収入の目標:1億5,000万円*)。また、自治体や政府への政策提言を行い、公的資金を活用したバウチャー事業の実施を目指します。

*一人当たり30万円(バウチャー費用、事業運営費)が必要と仮定して試算



財務・会計

正味財産増減計算書の要旨 (2015年4月1日から2016年3月31日まで)

(円)

	科目	2015年度実績	前年度実績	前年対比(%)
一般正味財産増減の部	1 受託事業収益	42,861,187	39,374,258	108.9%
	2 受取入会金・会費	65,000	65,000	100.0%
	3 受取寄付金(一般寄付金)	1,812,904	4,085,000	44.4%
	4 受取寄付金等振替額(指定正味財産からの振替額)	109,271,576	96,968,688	112.7%
	5 受取補助金	2,967,970	0	-
	6 雜収益	2,031,365	1,319,866	153.9%
	収益計	159,010,002	141,812,812	112.1%
指定正味財産増減の部	1 事業費	142,090,779	127,443,225	111.5%
	人件費	38,488,976	36,600,207	105.2%
	バウチャー利用額	64,278,109	59,507,378	108.0%
	その他事業費(CFC東日本・西日本事業)	20,418,464	16,864,237	121.1%
	その他事業費(受託事業)	18,905,230	14,471,403	130.6%
	2 管理費	16,907,223	14,385,629	117.5%
	人件費	5,472,524	2,089,602	261.9%
	その他費用(地代家賃・事務費等)	11,434,699	12,296,027	93.0%
	費用計	158,998,002	141,828,854	112.1%
	当期経常外増減額	▲ 12,000	0	-
	当期一般正味財産増減額	0	▲ 16,042	-
	一般正味財産期首残高	6,577,037	6,593,079	99.8%
	一般正味財産期末残高	6,577,037	6,577,037	100.0%
1 受取補助会費(バウチャー事業指定)	12,736,174	7,118,296	178.9%	
2 受取寄付金(バウチャー事業指定)	79,153,304	83,500,390	94.8%	
3 受取補助金等(バウチャー事業指定)	29,856,546	33,605,492	88.8%	
4 一般正味財産への振替額	▲ 109,271,576	▲ 96,968,688	112.7%	
当期指定正味財産増減額	12,474,448	27,255,490	45.8%	
指定正味財産期首残高	113,000,855	85,745,365	131.8%	
指定正味財産期末残高	125,475,303	113,000,855	111.0%	
正味財産期末残高	132,052,340	119,577,892	110.4%	

貸借対照表の要旨 (2016年3月31日現在)

(円)

	科目	金額
負債の部	1 流動負債	13,828,843
	未払金等	13,828,843
	負債の部合計	13,828,843
資産の部	1 一般正味財産	6,577,037
	(うち当期一般正味財産増減額)	0
	2 指定正味財産	125,475,303
	(うち当期指定正味財産増減額)	12,474,448
	正味財産の部合計	132,052,340
正味財産の部	1 流動資産	16,886,547
	普通預金	12,792,470
	未収入金等	4,094,077
	2 固定資産*	128,994,636
	特定資産(教育バウチャー事業等実施積立資産)	125,475,303
	公益目的保有財産	3,309,216
	その他固定資産	210,117
	資産の部合計	145,881,183

* 有形固定資産の減価償却累計額は1,227,049円です。

貸借対照表、正味財産増減計算書(損益計算書)及び財産目録は、法令及び定款に従い、法人の財産及び損益の状況を適正に表示しているものと認めます。

監事 津久井 遼

監事 藤井 美明

中長期ビジョンと2016年度の活動

2015年度は多大なご支援をいただき、
誠にありがとうございました。



役員

**代表理事
今井 悠介**
当法人専従

**理事
川北 秀人**
IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所]
代表者

**理事
船木 成記**
尼崎市 顧問

**代表理事
奥野 慧**
当法人専従

**理事
中室 牧子**
慶應義塾大学総合政策学部 准教授

**監事
津久井 進**
弁護士/弁護士法人芦屋西宮市民法律事務所
代表社員

**理事
岩切 準**
特定非営利活動法人夢聯人 代表理事

**理事
能島 裕介**
特定非営利活動法人
ブレーンヒューマニティー 理事長

**監事
藤井 美明**
公認会計士/PwCあらた監査法人

職員

CFC東日本事業担当
伊藤 理恵

大阪市塾代助成事業
担当
有銘 佑理

CFC東日本事業担当
鈴木 平

大阪市塾代助成事業
担当
石井 孝洋

CFC東日本事業担当
松尾 妃佐子

大阪市塾代助成事業
担当
大西 洋平

CFC東日本事業担当
広報担当
山本 雅

大阪市塾代助成事業
担当
川瀬 智子

CFC西日本事業担当
岡西事務局担当
岡本 明日香

大阪市塾代助成事業
担当
吉岡 新

アドバイザー

高橋 聰美 防衛医科大学校医学教育部 教授

武井 敦史 静岡大学大学院教育学研究科 教授

田村 太郎 一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事

出村 和子 一般社団法人日本いのちの電話連盟 理事

苦野 一徳 熊本大学教育学部 准教授

長尾 文雄 特定非営利活動法人ブレーンヒューマニティー 理事

半羽 利美佳 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科 准教授

水谷 衣里 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 副主任研究員

村田 治 関西学院大学長/あしなが育英会 副会長

トレーナー

阿部 裕二 東北福祉大学総合福祉学部福祉行政学科 教授

小林 純子 特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ 代表理事

佐藤 宏平 山形大学地域教育文化学部 准教授

佐藤 利憲 福島県立医科大学看護学部 讲師

西田 正弘 特定非営利活動法人子どもグリーフサポートステーション 代表

松浦 智博 一般社団法人ワカツク/キャリア教育コーディネーター

松本 幸子 宮城県中央児童相談所元職員/社会福祉士

長期ビジョン(～2020年)

全国の自治体等と連携し、国内の子どもたちの
教育格差の解消を目指します

日本国内の子どもたちの教育格差を解消するために、全国の自治体
や民間企業・団体と連携し、学校外教育バウチャー事業を広げてい
きます。

中期ビジョン(～2017年)

事業の精度を高め、学校外教育バウチャーの
モデルを確立します

教育格差の問題が深刻化している東日本大震災被災地に経営資源
を集中させ、より効果の高い制度を再構築するとともに、被災地の
自治体等と連携し、教育格差の解消を目指します。

2016年度の活動

バウチャー提供人数の拡大と、子どもたちの個別的な支援に取り組みます

より効果的な支援活動を行うために、支援対象の子どもたちを4つの領域に分類しています。

現在の学校外教育バウチャーの提供が有効なA領域の子
どもたちについては、一人でも多くの子どもにバウチャーを届
けることが課題です。これまでに5,000人以上の子どもが落
選していることを重く受け止め、寄付金の募集の強化や、自治
体への政策提言を行います。

また、子ども本人の意欲が低下しているB領域、親の意欲が
低いC・D領域の子どもたちについては、大学生ボランティア、
教育事業者、自治体、学校、地域の支援団体等と協力しなが
ら事業を展開し、より効果の高い制度を再構築します。2016
年度は、次の取り組みを行います。

B領域の子どもを支援するための施策

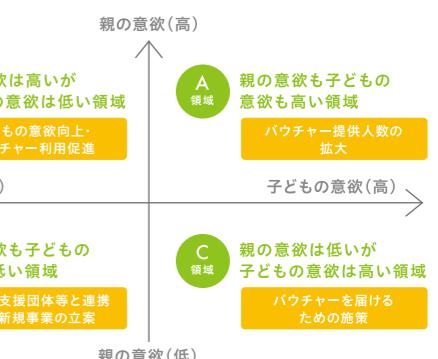
2015年度に引き続きブラザー・シスター事業の強化に取り組むと
ともに、2016年度はバウチャー利用先の拡充を図り、子どもたちが
よりバウチャーを利用しやすく、教育効果の高い制度を作ります。

①ブラザー・シスター制度の強化

2015年に引き続き、子どもたちを支えるブラザー・シスターの研修
プログラムや面談方法の改善を行い、子どもたちへのフォローアップ
をこれまで以上に強化します。

②バウチャー利用先教育事業者の拡充

バウチャー取扱教育事業者の登録制度を改善し、幅広い教育事業
者に参画していただくことで、子どもたちの選択肢を広げます(主に
ICT教育、体験活動分野等)。



C・D領域の子どもを支援するための施策

2015年度は、仙台や石巻地域の支援団体とのネットワーク構築に
努めました。2016年度は、それらのネットワークを基盤に、新しい
支援事業の設計やリサーチ等を行います。

①生活支援団体と連携したバウチャー提供(C領域)

子どもや親の生活支援(食事・居場所提供等)を行うNPOと連携し
て、親の意欲が低い子どもたちに対してもバウチャーを提供できる体
制を作り、生活支援と教育支援の連携を目指します。

②新規事業の立案準備・リサーチ(D領域)

将来的に、多様なセクターと連携して子どもを支えるための新規事
業を開始します。その準備として、2016年度は、支援団体や子ども
たちのリサーチを行います。

大規模災害被災地でのバウチャー制度の創設について

2016年4月に発生した熊本地震を受けて、CFCは今後大規模災害発生
時に、被災した子どもたちに対する緊急支援として、学校外教育バ
ウチャー提供を行う制度を新たに創設しました。2016年度は熊本地震で
被災した子どもたちに学校外教育バウチャーを提供します(2016年8月
よりバウチャー提供開始予定)。



報告書の制作にご協力いただいた皆さま



写真撮影

安田 菜津紀さん フォトジャーナリスト

studio AFTERMODE所属フォトジャーナリスト。現在、カンボジアを中心には、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。1987年神奈川県生まれ。



取材・ライティング

辻 和洋さん ライター・エディター

元読売新聞記者。東日本大震災では、発生翌日から宮城県沿岸部を取材。現在は大学の研究所で、人材育成の教材を開発。kaz.0402@gmail.com



sai company
サイエンス会社

デザイン/制作ディレクション

サイカンパニーさん

NPOを専門としたデザイン会社。多くの団体の、プランディング、WEBサイト、パンフレット、年次報告書などを手掛ける。www.saicompany.jp

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

仙台事務局 宮城県仙台市青葉区本町1丁目13-24 錦ビル7階

東京事務局 東京都江東区亀戸6丁目54-5 小川ビル2階

関西事務局 兵庫県西宮市甲風園1丁目3-12 カミヤビル3階

TEL: 022-265-3461(代表) FAX: 022-265-3471(代表)

E-mail: info@cfcc.or.jp

CFC

検索

チャンス・フォー・チルドレン (Chance for Children)

@bh_cfc